



Data

監督：デヴィッド・クローネンバーグ

原作（戯曲）・脚本：クリストファー・ハンプトン

出演：マイケル・ファスベンダー／ヴィゴ・モーテンセン／キーラ・ナイトレイ／ヴァンサン・カッセル／サラ・ガドン

👁️👁️ みどころ

フロイトは精神分析の創始者として知られているが、その後継者と目されたユングを知ってる？冒頭に見る「談話療法」は興味深い、そこから導かれた女性患者の深層心理とは？

医師と患者との許されぬ愛といえは凡庸だが、本作に見る葛藤はもっと高尚？キーラ・ナイトレイの口をゆがめ顔を引きつらせる演技やベッド上でムチ打たれる演技にはビックリだが、いかんせんあまりにも学術論争が多すぎ！しがたって、たしかに勉強にはなるが、「映画はエンタメ」という本質からはマイチ・・・？



■□フロイトは誰でも知っているが・・・？■□

今でこそ心理学や精神分析の学問は非常に発展しているが、19世紀から20世紀はじめにかけての時代では「意識と無意識」とか「夢判断」と言っても誰もがそりゃ一体ナニ？と言われていた時代。そんな時代に、はじめて精神分析という学問を提唱するとともに、開業医としてそれを実践したのがジークムント・フロイト（1856年～1939年）。

フロイトは、マルクス、ニーチェとならんで20世紀の文化と思想に大きな影響を与えた人物の1人だし、イギリスの王立の科学協会からニュートン、ダーウィンに続いて3人目となる科学的評価も受けているそうだから、その名前には誰でも知っている？もし知らない人でも、本作を見ればフロイト（ヴィゴ・モーテンセン）の功績がよくわかる。

■□ユングとシュピールラインは？■□

本作の主人公は、一時期そのフロイトを父のように仰ぐとともに、その後継者と目され

た若き精神科医カール・グスタフ・ユング（マイケル・ファスベンダー）。そして、ストーリー展開の軸となるのは、統合失調症患者としてユングの治療を受けながら、ある時から医師と患者の一線を越える関係となったうえ、ユングと別れた後は自らも精神分析医として大成した女性ザビーナ・シュピールライン（キーラ・ナイトレイ）。

このユングとザビーナについては私を含めて多くの人が知らないだろうから、この時代に3人の間でこんな物語があったことは驚きだし、大いに勉強になる。しかし、本作で交わされる会話はかなり高度で専門的だから、しんどい、しんどい。

■この美女の「怪演」にビックリ！その1■

キーラ・ナイトレイはイギリス生まれの正統派美女だから、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズでのじゃじゃ馬娘も似合った（『シネマルーム3』101頁、『シネマルーム11』20頁、『シネマルーム15』14頁参照）が、やはり『プライドと偏見』（05年）



【危険なメソッド】
10月27日（土）TOHO シネマズシャンテ、Bunkamura ル・シネマ他全国ロードショー
©2011 Logo Film GmbH Talking Cure Productions Limited RPC Darger Ltd Elbe Film GmbH. All Rights Reserved.

（『シネマルーム10』198頁）や『つぐない』（07年）（『シネマ19』306頁）、『ある公爵夫人の生涯』（08年）（『シネマルーム22』122頁参照）でのクラシックな服装の方がよく似合う。また、『わたしを離さないで』（10年）で見せた演技力は抜群だった（『シネマルーム26』98頁参照）。

そんなキーラ・ナイトレイが本作冒頭では、口をゆがめ顔を引きつらせながら叫びまくるヒステリー症状を見せてくれるからビックリ！そしてまた、この美女が吐く「私は不道徳で、汚らわしく、墮落しているんだわ」のセリフにもビックリ！

■この美女の「怪演」にビックリ！その2■

フロイトが提唱し、ユングが実践した「談話療法」によって明らかになったのは、ザビーナの心の奥深くに潜むアブノーマルな性的欲望。なぜそんなものが植えつけられたのかを探り、その治療法を探るのが精神分析医としてのユングの仕事だが、さてその展開は？

他方、出番は少ないが興味深いキャラは、フロイトからユングに紹介されたもう1人の患者otto・グロス（ヴァンサン・カッセル）。グロスは精神分析医でありながら薬物に

溺れている男だが、いつの時代も彼のような快樂主義者はいるもの。公然と「一夫一婦制」を否定する彼は、主治医のユングに対して「患者の女と寝たことはあるか?」「快樂を拒むな」「衝動に降伏しろ」とアドバイスしたが、これはユングの深層心理にいかなる影響を? 「サディズム」はマルキ・ド・サドの小説によって有名になったが、本作でもグロスのアドバイスに忠実に従った(?)ユングと、もともと深層にアブノーマルな性的欲望を持つザビーナとの間で2度にわたってベッド上での「そんなシーン」が登場するから、そんなキーラ・ナイトレイの「怪演」にも注目!

■□■美女の「熱演」に比べると・・・■□■

私は8月16日～24日の上海・合肥・南京・上海旅行における8月22日、23日の南京観光で「孔子廟」をつぶさに見学した。そこでは「孔子の一生」が壁画の中で描かれていたが、私は2011年9月29日に胡玫(フー・メイ)監督の『孔子の教え』(09年)



『危険なメソッド』

10月27日(土) TOHO シネマズシャンテ、Bunkamura ル・シネマ他全国ロードショー
©2011 Logo Film GmbH Talking Cure Productions Limited RFG Danger Ltd Elbe Film GmbH. All Rights Reserved.

『シネマルーム27』99頁参照)を観ていたため、その一生を容易に理解することができた。孔子の一生は権力闘争と浮浪の旅だったから、生き方そのものが波乱の一生だったが、本作に見る精神分析の権威フロイトも、若き精神科医ユングも、高級スーツに身を包み難解な言葉を駆使しながら学術論争をくり返しているだけ(?)だから、孔子ほど波乱に満ちた人生とは言えない。このように本作の素材は、どちらかという映画に適したものとは言えないため、キーラ・ナイトレイの熱演に比べると、マイケル・ファスベンダーもヴィゴ・モーテンセンも静かな演技に終わっている。

フロイトはタバコが大好きだったそうだが、本作でマイケル・ファスベンダーは『SHAMEーシェイムー』(11年)で見せた大胆な演技(『シネマルーム28』186頁参照)を封印し、静かな演技を。またヴィゴ・モーテンセンも『イースタン・プロミス』(07年)で見せたアクション俳優としての能力(『シネマルーム19』199頁参照)を封印し、常に葉巻をくゆらせる紳士的な学者フロイトを静かに演じている。これはこれで1つのテーマを追求した立派な映画なのだろうが、それだけではどうもイマイチ。もっともその方面の知識吸収に意欲のある方には本作はピッタリだから、その気になればしっかり勉強できることはまちがいない。

2012(平成24)年9月14日記